



TITLE:

# 法然院 梶田真章 住職が語る : お寺で学ぶ、人間と自然の関わり方

AUTHOR(S):

---

CITATION:

法然院 梶田真章 住職が語る : お寺で学ぶ、人間と自然の関わり方. 公共空間 2014, 12: 43-46

ISSUE DATE:

2014

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197680>

RIGHT:

本誌掲載の写真・イラスト・記事の無断転載・二次利用はお控え下さい.

## 法然院 梶田真章 住職が語る

### お寺で学ぶ、人間と自然の関わり方

京都は、古都として伝統的な寺社仏閣が多く存在し訪れる人々を魅了している。今回は、お寺の持つ美しい庭園や豊かな森林環境を活かし、精力的に環境活動を行っている法然院住職・梶田真章氏に取材をさせて頂いた。法然院の行う環境活動のきっかけ、これまでの活動内容、現代のお寺の果たす役割、そして人間と自然の関わり方について梶田住職のお話をもとに紐解いていきたい。

**まず、法然院の環境を活かして、環境活動を始められたきっかけについて教えてください。**

「一九八四年に住職になりましたが、お寺に來られる方々が法然院の持つ森林や庭園などを『良い環境ですね』とよく言って頂いていました。これは、ありふれた森林環境が普通ではなくなってきた、つまり『良い環境』自体が少なくなってきたことの裏返しなのではないかなと思うようになりました。それならば、法然院の環境を活かして何かでき

ないかな、というのが始まりでした。

それと合わせて、先代の住職が寺は『開かれた共同体』でなければならぬと言っていました。銀閣寺は

観光客が訪れる場所であるのと同じように、法然院は主に法事で利用される方が訪れます。しかし、このままだと銀閣寺では観光客だけとの関わり、法然院では法事で來られる方のみとの関わりになり『閉ざされた共同体』になってしまいます。先代は哲学者だったこともあり、現代風俗研究会というのを開催するなどして、法事で來られる以外の市民の方々と寺で集い、現代において私たちが社会の中で何をしなければよいのか、ということを考える場を提供していました。そこで私は、法然院の環境を活かして、環境問題を入り口にして、お寺が市民の方々が集える共同体になればと思います、環境学習活動を始めました。」

**これまで、法然院ではどのような環境活動を行ってきたのでしょうか。**

「当初、私は自然や動物に詳しくありませんでしたが、近所に鳥を観察されている方に会い、一九八五年にその方と一緒に『法然院

森の教室』をスタートさせました。そこでは、市民の方々とフィールドに出て、様々な生き物を観察し、人間と他の生物の関わり方を学び直し、現代社会でどう生きていけばよいのかということ問い直す場を作りました。具体的には、月一回のペースで専門家の先生にお話をして頂く講演会と実際にフィールドに出る自然観察会を交互に行いました。加えて、写真展を開いたり、アマゾンの環境問題の専門家を呼んだりして、身近な環境だけでなく、地球規模の環境問題についても考え直してもらう機会を作りました。

森の教室自体は誰でも参加可能で、テーマによっては大人も多ければ、子どもが多いときもありました。そこで、次に『森の子クラブ』という子どもだけを対象とした環境学習活動を始めました。これは四月から三月の一年間のプログラムで、鴨川に野鳥を観察したり、法然院に泊ったり、大文字山の森を散策するなどし、子どもたちに環境学習を体験してもらいものです。

その後、一九九三年に市民の方々が、いつ法然院にお越し頂いても、環境のことを学ぶことができる「法然院森のセンター」を設立しました。ここでは、ギャラリー、事務所、活動ルームを常設し、いつでも市民の方々が

来て頂いて、環境について学ぶことができる場を整えました。以後は、この森のセンターを拠点に、環境学習活動を広げていっています。

最近では、これまでの森を観察するだけの活動から、森を自分たちでつくる活動を始めました。昔の人は、山から木を切り、薪を取っていたので、森がある程度開け、光が行きかう明るい森でした。しかし近年は、人が森に入らず手入れをしないので、森自体がうつそうとし、暗さが漂ってしまっています。このような森から、昔の様な明るい森を復活させようということで、市民の方々と将来の森のあり方を描いて、伐採を定期的にするなどの森づくりの活動を二〇〇三年頃から始めました。」

**環境活動を行っていく中で、大切にしているポイントは何ですか。**

「ありのまま、そのままの自然と付き合うということを大切にしています。法然院の森ではムササビが住んでいるので、子どもたちと観察会をする時があるのですが、もちろんムササビを見られる時と見られない時の両方があります。テレビの番組や動物園などの展示施設では、いつでも見られますが、自然の森

ではそうではないです。大人がせっかく観察会の準備をしたのに、自然環境では、見られる日もあれば見られない日もあり、そのことを子どもたちに理解してもらいたいと考えています。ありのままの自然やそのままの自然にしっかりと向き合い、付き合っていくことが何よりも大切です。」



**法然院森のセンター** 施設内部には写真・木工品などが並ぶ

**環境活動を行ってきた中で、近年の地球温暖化などの環境問題にどのような危機感をお持ちでしょうか。**

「先ほどの森の荒廃の話のように、人々と森とのつながりが日常的から徐々に稀なものとなり、人々が自然に対し関心を持たなくなってきた感じがします。昔であれば、各家に井戸があり、その水は山から地下を通じて飲み込んだ水だということは理屈ぬきに日常的に理解できていました。このような日常的体験から、山という自然から来た水を飲んで、自分たちは『生かされている』という想像をすることは容易でした。しかし、今は蛇口をひねったら水がでる、もつと言えば、日本の水を飲まないでアメリカのミネラルウォーターを飲んで生活するという時代です。日本は水資源が豊富な国なのに、海外からわざわざ水を輸入して平気にいる日本人は、本当に自然を大切にできるのか、自然を大切にしてきた歴史を継承できるのか、という危機感を覚えて、これまで活動してきました。

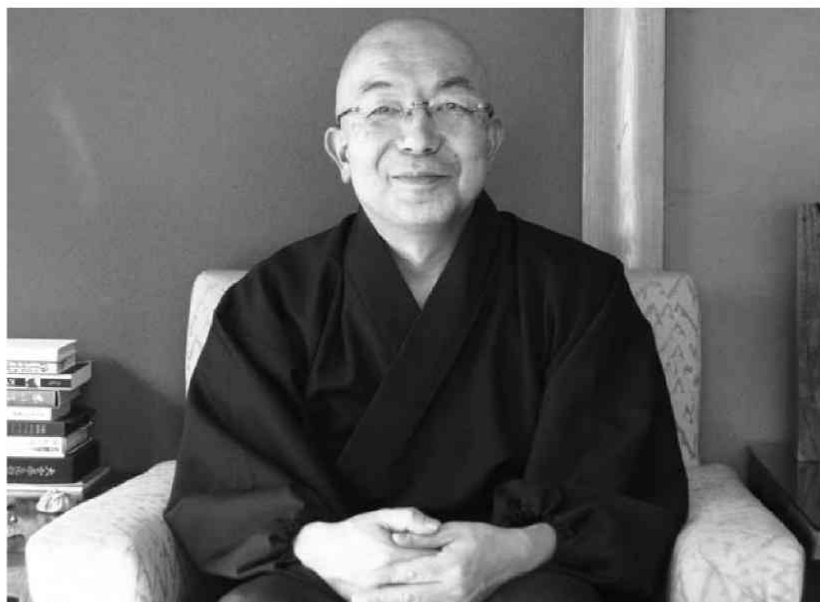
特に、法然院の環境活動を始めた一九八〇年代には、京都市の大文字山にゴルフ場を作る、賀茂川上流にダムを建設するなどの話しが盛り上がっていましたので、当時から現実的な環境問題への関心は強かったです。」

**梶田住職は、京都市環境政策局の審議会の委員も務められましたが、京都市の環境政策に対してどのような印象をお持ちですか。**

「良いことを掲げてはいますが、やっていることは違う印象を受けます。やはり、環境保全と経済発展を天秤にかけ政策を進めているので、どちらを取るとなると経済発展を優先的に進めている感じがします。」

一例を挙げれば、京都水族館ができたことです。先ほどから申し上げている通り、身近な環境を使って、そこに生息している生き物と出会って、そこから自分の生き方を考えていくのが環境学習だと思います。しかし、遠くから動物を連れてきて、海のない京都に水族館をたて、それを環境学習と称して推進しています。これはまさしく、環境という言葉を用いて、経済発展を優先している象徴だと思います。

景観保全に関しても同じです。言葉は景観を優先したまちづくりと称していますが、どこまで実際の政策に反映しているかは疑問です。やはり、環境保全と経済発展を比べたら明らかに経済発展を重視して政策を推し進めている、言っていることとやっていることが違う、という印象を受けますね。」



取材をお引き受け頂いた法然院 梶田真章 住職

間以外の生き物を指しているのか、あるいは、生き物は全て除いた単純に川という器のことを指しているのか、という三つくらいの意味があります。

**環境政策などには「人間と自然の共生」という言葉がよく使われます。人間と自然との関わり方はどうあるべきとお考えですか。**

『人間と自然との共生』という言葉を聞くときに、いつもその『自然』は何の意味を指しているのか定かではないことが多いです。『自然』という言葉は本当に曲者で、例えば、賀茂川の自然と言ったときに、土手を歩いている人たちも含まれているのか、それとも人

『人と自然の共生』を考える際には、その『自然』はいったい何の意味を表しているのかを考え直さなければなりません。大抵『人と自然の共生』と言った場合、人間とほかの生き物、あるいは川などの器とどう共生していくかという意味で使われている場合が多いです。これだと、人間は他の生き物とは違って、特別な生き物であることを明示し、西洋的な言い方をすれば、人間は神様から創られ、他の生き物を滅ぼしたり、開発したりするという思想がベースとしてあります。人間とはもともと弱い生き物で、互いに支え合いながらなんとか現代まで生存してきました。しかし、科学技術の発展と共に、自分たちの力を過信し、他の生き物たちに優越感を持つようになったと感じています。

自然とは生き物を支える仕組みです。自然が豊かであれば、単に生き物の数が豊富なかんだけではなく、生き物同士の関係性がしっかりと育まれていることです。人間は自然の一部として、他の生き物と良好な関係性を育んでいくことが大切です。」





法然院の庭園。鳥のさえずりが聞こえる。

最後に、今後の法然院の環境活動の目標や現代におけるお寺の役割についてお聞かせ下さい。

「法然院としてこれまでの環境活動を継続的に行っていきたいと思っています。ただ、私も五十代なので、次の代に引き継いで、さらに発展していかなければならないという課

題が残っています。

先代の『お寺は開かれた共同体』であるべきという信念のもと、これまで環境活動を通じて市民の方々に集っていただく場を提供してきました。環境問題はあくまで入り口で、さまざまな関心を持った人がお寺に集い、また新たな活動が生まれるような結合点としての役割を担ってきたのかなと考えています。あえて言えば、お寺は生涯学習の場として、何か活動をしたければ、法然院に来て活動ができるという空間にこれからもしていきたいですね。

お寺は、現代の生涯学習施設などと違い、コンクリートの施設の中ではなく、森の生の環境の中でお話をし、自分の生き方を考え直す場としての役割があります。何かの集いを行えば、周りから鳥の声が聞こえ、夜にはムササビの鳴き声が聞こえます。このような自然環境の中で、活動を行うからこそ本当の環境学習活動ができ、そして自分の生き方を見つめ直す機会になるのではないかと考えています。」

### 所感

今回は、寺社仏閣が多い京都でその豊かな自然環境を活かし、環境活動が行われている

法然院の梶田住職に取材をさせて頂いた。法然院のこれまでの活動やきっかけを話して頂く中で、そもそも人間と自然はどのように関わっていけばよいのかという本質的な問いに正面からお答え頂いたと感じている。

科学技術の発展とともに、人間は自然をコントロールできる存在であるとの認識が広がったが、人間は自然の一部であり、自然に生かされているという事を改めて忘れてはならないだろう。今回の取材が、読者の方々に環境政策・環境活動などを考案していく上で、礎のようなものを提供できたら幸いである。

(文責 鈴木悠)

### 梶田 真章

かじた しんしょう

法然院第31代住職。住職になった翌年の1985年から「法然院森の教室」を始め、環境活動を精力的に行う。お寺を「開かれた共同体」として、広い意味で生涯学習の場を提供している。京都市環境政策局の「環境にやさしいライフスタイルを考える市民会議」の委員も務めた。